

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 28 年 7 月 20 日	
所属部局・職	霊長類研究所社会生態分科・修士課程学生
氏名	石塚真太郎

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
北海道目梨郡羅臼町本町
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
羅臼シャチ調査実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 28 年 6 月 29 日 ~ 平成 28 年 7 月 4 日 (6 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
山本博士 (野生動物研究センター)
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
今回のシャチ観察実習は、知床の海の生態系を学ぶこと、海生哺乳類の調査法を学ぶこと、自然と地元の人々が共生していくうえでの障壁や、その上での現状を知ることを目的として行われた。私にとって、調査船を用いて海生哺乳類を調査するのは、完全に初めての経験であった。 調査は 6/30-7/3 の 4 日間、早朝 5 時から午後 4 時までの間行った。調査ではまず、シャチを探すところからはじまった。これまでの調査で数頭のシャチに発信機が装着されていることから、まずはそれらの情報を頼りにシャチの居場所の目星をつけた。おおよそシャチがいる場所までたどり着くと、次は双眼鏡で水面に浮かぶ背びれおよび呼吸の水しぶきを探した。これらを見つけ、船を近づけるとようやくシャチの直接観察ができた。船上でシャチを探す中で、海生哺乳類の探し方は、霊長類の探し方とは大きく異なると気づいた。まず、霊長類を探すときに極めて有力な手掛かりは音声だが、シャチを探すときにはほとんど頼りにしなかった。おそらく海生哺乳類は霊長類よりも音声を発する頻度が低いことや、音声が波音や船のエンジン音にかき消されてしまうことが理由だろう。次に、研究者がもつ距離感覚が全く異なっていた。私はシャチ研究者からの「近い」という指摘を受け、船回りおおよそ 100m 程度を探したものの、一向に見つからなかった。しばらくして、実際にシャチがいたのは船から 1Km 以上も先だったということが分かった。植物が茂る環境でくらす霊長類と違い、水平線が果て無く広がる海で暮らすシャチだからこそ、例え 1km 以上離れていてもよく見えるため、「近い」という表現ができたのだと思う。 シャチを観察する中で、敵対的關係や攻撃性に関心をもった。私が研究している霊長類では、攻撃交渉が起こり、劣勢になると樹上等のオブジェクトを利用して逃避し、身を守ることができる。しかし、シャチ等海生哺乳類には、生息環境に適当なオブジェクトがないことから、種特有の攻撃性を抑制する機構が必要なのではないかと思った。他の研究者の話や、シャチの身体に噛みつかれた跡が残っていることを考えると、シャチに攻撃交渉がないわけではないように思える。シャチの攻撃交渉がどのようなときに激化し、いかにして仲直りするのかわかることができればよいと思う。また、シャチが単雄複雌の集団構成をとっているのは、集団内のオスの繁殖競争を抑え、激しい攻撃交渉を減らしているのかもしれない。 調査船は、シャチを追跡する際にできるだけシャチの遊泳の通り道に出ないようにしているとのことだった。また、現在シャチ観覧の船は同時には最大 3-4 隻しか海に出ないそうだ。これらの心がけは、私たちが霊長類研究で心がけていることと同じであった。シャチであろうと霊長類であろうと、野生動物と適度な距離を保ち続けることが、持続可能な研究につながるのだと思う。また、シャチの遊動域は日本とロシアの国境をまたがっており、シャチがロシアの国土側に行けばそれ以上追跡することができなかった。国境が野生動物調査の障壁になるというのも初めての経験であったが、今後の研究でも場合によっては、考慮する必要があるのだと感じた。 これまで野生霊長類の研究をしてきた中、今回はじめて海生哺乳類調査をしてみると様々な新鮮な経験を得ることができた。その中には、野生霊長類研究と同じ側面も大きく異なる側面もあった。今回得られた経験は、今後私が行うフィールドワークの中での視野を広げてくれると思う。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



一頭のシャチ



たくさんのシャチ



仰向けになるシャチ



飛び上がるシャチ

6. その他 (特記事項など)

本実習は、PWS リーディング大学院プログラムの支援を受けて遂行できました。PWS プログラム、引率して下さった山本様、および参加者の皆様に感謝申し上げます。